

Kaup 指数により比較すると、独・米では一歳では体重が身長  
の發育に比べてまきり、三歳～六歳では、逆に身長が体重に優つて  
いるといえよう。その後は漸次身長に比べて体重が増加する傾向は強  
度になってくる。それに比べて(日)は、そのような年令的にはつ  
きりした段階があらわれていない。一歳から一二歳まで Kaup 指  
数はあまり大きな変化がなく、一三歳頃から体重が身長にまさつて  
くる傾向がみられる。

#### c. Proportion の比較。

發育の違ひのあらわれるのがほぼ二歳頃であるという結果を得た  
ので、さらに検討をするため長軸の發育の比較を試みた。全頭長  
は、全期を通じて(日)が優っている。下肢長(身長—坐高)は二  
歳までは、ほぼ等しいか若干(日)が長いくらいであるが、三歳に  
なるとその関係は逆になる。以後同じ傾向をたどる。長胴短脚のき  
ざしは二～三歳頃からみられる。一二歳頃が日本人の長胴短脚をき  
める最後の發達段階であるという説もあるが、今回の調査では認め  
られなかった。さらに、下肢長の各部分、大腿、下腿、足高、いず  
れの部分がどのように發育するのか、その年令による増加傾向は今  
後の問題としたい。大山氏は、坐高の發育は比較的外的生活条件に  
は影響されないが、下肢長はかなり影響されると報告している。わ  
が国の乳幼児の下肢長に関する研究は僅少であるが、長軸發育にあ  
たって見落せない問題である。

#### d. 食餌摂取量の比較

身体發育、体型および下肢長の相異を作り出している要因として  
は、民族差・風土的影響さらに栄養・養護・運動量など種々の要因  
が考えられるが、それらを比較しうる資料が少ない。栄養について  
のみ附随的に報告する。栄養の問題についても同様に、子どもを対

象とした調査が僅少である。したがって大人の摂取量より類推す  
る。独・米・日の一人一日当り摂取食糧構成を比較すると、(日)の  
肉類・乳類の摂取量は彼らの $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{1}{2}$ であり、油脂・卵類は約 $\frac{1}{2}$ 程度  
である。魚類の摂取がわずかに二～三倍であるのみで、総蛋白およ  
び動物性蛋白・脂肪の摂取量には大きな違いのあることが判る。炭  
水化物の摂取量に若干(日)が多い。ビタミンおよびカルシウムも  
問題となるところであるが、それらに関する資料がない。

なお、本研究はお茶の水女子大学山中加代子との協同研究であ  
る。

## 健康観察結果の処理について

大内保育園 藤 本 千 代

幼い子どもたちが、常に健康を保ち、よりよい成長をとげるため  
には、適切な健康観察結果の処理が、必要であることは、よく理解  
しているながら、それでは、どのような方法で、これを行えばよいか  
と、いうことになると、朝早くから夕方おそくまで、寸暇もない保  
育という仕事の中で、実際にできる程度で、しかもよい方法が、な  
かなか立案できないことを、私は、常々残念に思っているもので  
す。

ここでは、健康観察の経過についてのべます。

一、成長発達についての観察(身体測定)

## 二、日々の健康状態についての観察

と、大きく二つに分かれると思います。ここでは、主に、(二)の日々の健康状態についての観察結果の処理について、述べたいと思います。

まず、登園してきたときの、視診から始まって、下園するまでの健康観察結果を、健康観察簿に記録いたします。開園当初は、個々のことについて、文章で記録いたしましたでしたが、これでは、ますます事務が多忙になるばかりで、一見してその結果を、知ることができないので、いろいろ考えましたあげく、このような健康観察簿を作りました。

### ○健康観察簿の説明および処理系統図の説明

#### ○衛生日誌の説明

#### ○健康観察結果の集計について

##### 1. 個人集計（健康観察月別集計表）について説明

2. 第一表（フリント）（三十一年度統計）  
示（三十年度と三十一年度の比較対照表）

3. 第二表（フリン）（三十一年度統計）  
示（三十年度と三十一年度の比較対照表）

#### ○健康管理早見表の説明

#### ○その他

##### 1. 日々の連絡票の説明

##### 2. 体重減少についての連絡票の説明

3. 健康についての年度末家庭連絡票の説明（進学児は小学校へ連絡）

以上、私ども職員全員が、ベストをつくして、行っている健康観察結果の処理の概要を、述べました。ささやかな発表ですが、愛すること私たちの幸福のために、またよりよきを期する意味におい

て、皆様のご批判をいただければ嬉しく存じます。

## 幼児の間食に関する研究

日本女子大学

武藤 静子

加藤 翠

桑原 綱

間食は子どもにとって必要なものだと一般に考えられている。しかし、その有り方についてはいまだ意見の一致がみられない。この間食の有り方を見出す手段の一つとして今回二つのグループについて間食のとり方、与え方について調査した。

第一は岩手、和歌山の両県の農村と漁村それぞれ一か所の保育所幼児二〇名ずつ、計四〇名、これに東京有識階級の幼児一〇名を加えたものが調査対象である。昭和三〇年の夏と冬に身体測定、臨床検査、生化学検査、食餌調査を行った。食餌調査は一人の子どもにつき二日間調査員が秤を持ってついて歩き食べたものを全部記録する方法をとった。

子どもが間食によって一日何カロリーをとっているかをみると、各地平均が大体二〇〇〜四〇〇Calである。しかし、個人差が大きく、少いのでは四〇Cal、多い場合は九〇〇Calを与えており、間食の与え方はかなりでたらめになっていると考えられる。これらは一曰総カロリーの約二〇％になるが、もちろんこれも変動が大きく、少い時は一日摂取量の三％、多いのでは六〇％近くを間食でとってい